

## シェイクスピアの時代の薬剤師と 『ロミオとジュリエット』

遠藤 花子

実践女子大学

16世紀後半から17世紀にかけてのイギリスの医学関係者は、主に、医者(Physician)、外科医(Surgery)、薬剤師(Apothecary)に大別できる。医者は紳士、外科医は職人、薬剤師は商人とみなされ、1600年のロンドンには、医者は約50人、外科医と薬剤師がそれぞれ約100人、その他250人の医学関係者がいたと推定されている。この時代、特に地方は、医学的知識人の深刻な人数不足から、各家庭の主婦たちが患者の看病や治療を代行していたが、家庭で手に負えない場合、人々は医者ではなく、薬剤師や偽医者に頼る傾向にあった。今回の発表では、このような16世紀から17世紀にかけて活躍した薬剤師について、歴史的、文化的側面から触れてみたい。

17世紀が始まった頃の薬剤師は、食料雑貨商(Grocer)と同一視されていた。薬剤師(薬屋)としての職は13世紀から始まるが、正式に薬剤師が薬剤師として独立するのは1617年のことであった。それまでは、薬剤師は食料雑貨商の傘下であり、14世紀の“Grocers' Company”から、1605年の“Grocers' Guild”に至るまで約3世紀の間、このような状態が続いた。各地方都市では、薬剤師は商人の一人とされることもあり、扱われ方は様々であった。16世紀から17世紀にかけての一般的な薬剤師は、勝手に薬を調合する資格がなく、医者の方箋をもとに薬を調合することしかできなかった。しかし、この時代、イギリスでは医学的な行為に対して厳しい規制がなかったため、薬剤師の中には自由に医者の手伝いをしたり、自ら医療活動を行う者もいた。人々の生活の密着していた薬剤師は、医者以上に頼られる存在であったのだ。

人々の身近な存在であった薬剤師は、当時のロンドン市民の最大の娯楽であった演劇の中でも見られる。例えば、16世紀後半からロンドンで活躍したシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の中で、薬剤師が登場する。この作品の中で、薬剤師は小さな役のため、登場は1場面のみで、ほんの数行のせりふしか述べていないが、絶望の淵に立っているロミオからせがまれて毒薬を渡す役割を担っている。最終的にロミオはその毒薬で命を絶っているところから、薬剤師が与えたこの毒薬こそが、『ロミオとジュリエット』を、悲劇に導いたと言っても過言ではない。

『ロミオとジュリエット』の薬剤師は、貧乏でありながら、毒薬を扱う危険な存在である。現に、薬剤師は、毒薬を売ることは死刑に値すると述べるなど、分かっているが貧乏に勝てずに毒薬を売る。だが、実際に当時の薬剤師が、治療薬として最も一般的であった薬草だけでなく、毒薬を扱っていたことは事実である。薬の調合に関しては、『ロミオとジュリエット』に登場するロレンス神父も行っている。彼は、薬草を自分で栽培するなど、薬草に高い関心を示している。これは、当時の教会関係者たちが医学的な知識を持っていたことや、教会の庭で薬草が栽培されていたことも反映されている。ロレンス神父のように、ガレノス医学に基づいた薬草の研究をしていた人は、イギリス各地で散見されているのである。現に、ロレンス神父に助けを求めたジュリエットに、3日間仮死状態になる睡眠薬を調合するのも彼である。作品の中で扱われている薬は、いわゆる毒ではあるが、この時代の人々が、薬(毒)の知識を持つ人を頼りにしていたことは明らかである。

以上、16世紀末から17世紀にかけての薬剤師を調査してみると、現在と同じように、医者の発行した処方箋をもとに、薬を調合していたことが分かるが、医学関係者として自由な活動をすることは規制されていた。しかし、人々は、医者ではなく、薬剤師や、その他の薬の知識をもつ人々を頼りにしていたことは非常に興味深い点である。